

はじめに

東アジア（東北アジアと東南アジアを合わせた地域）に新しい時代が訪れている。何がその新しさをもたらしているのか。それはなによりも中国の台頭である。そして、きたるべきインドの台頭である（インドは東アジア国家ではないが、アジア国家である）。

日清戦争や日露戦争から一世紀以上が過ぎ、アジア太平洋戦争が終結してからも七〇年近い年月が流れた。東アジアにおける過去一世紀の主役は、よくも悪くも日本だった。その「日本の世紀」の前半は軍事大国として、後半は経済大国として、日本はこの地域で大きな存在感を示してきた。

三十数年前の一九八〇年前後、経済大国化した日本は「ジャパン・アズ・ナンバーワン」と称えられた。その時代を体験したことのない者は、「そんな時代があったのか」と驚くかもしれない。その時代、日本、および東アジアはいかなる状況であったか。今日の東アジアとは別世界であったことを描いたのが、本書の第Ⅰ部である。

それから三十余年、二〇一〇年代前半の今日の東アジアについて書いたのが、第Ⅱ部である。そこでは「チャイナ・アズ・ナンバーワン」といわれるように、中国が台頭して日本をしのぐ経済大国となっている。

そして、近い将来の二〇二〇年、あるいは二〇三〇年をみすえたとき、中国とともにインドが台頭しているだろう。それが第Ⅲ部で記した東アジアであり、その新時代の主役は中国であり、インドである。日本ではない。その新時代においては、東アジア共同体創設への動きがより現実のものとなっているだろう。

私たちはどんな時代を生きてきたのか、私たちはどんな時代に生きているのか、そして、私たちはどんな時代を生きていくのか——それを確認しようとしたのが、第Ⅰ部から第Ⅲ部までである。東アジアの過去と現在と未来である。

私は、ものごとを歴史のなかでとらえる歴史的思考が大切だと考えている。それによって歴史の流れを把握することができる。過去を知ることなくして、歴史に学ぶことなくして、現在を理解することも、将来を見通すこともできない。歴史に学ばない民族、国家に未来はない。本書の構成は、そうした考えにもとづいている。

過去を振り返り、私たちが歩んできた道をたどることで、時代の変化をよりよく把握することができ、日本と東アジアの現状をよりよく理解することができる。これからの時代において、私たちがなすべきこと、歩むべき道を考えるうえでも、過去を知ることが不可欠である。

新しい時代において、日本はいかにあるべきか、台頭する中国、そしてインドといかにつきあうべきか、私たちはどのような道を歩むべきかを論じたのが終章である。

敗戦以来の対米従属体制から抜け出し、新しい東アジアのなかでより自立的に歩むこと、それが日本および日本人に求められている、と私は考えている。そして、東アジア共同体の構築にむけて、中国やインドとともに競争的協調をすべきだと考えている。そうしてこそ新しい時代の東アジアに平和と繁栄をもたらすことができる、と私は確信している。

だが、私たちは今、私が歩むべきだと考える方向とはまったく違った方向に駆け出しているのではないか。私たちは今、虚偽で塗り固めた「美しい日本」という欺瞞的な歴史観を抱きながら、戦後の平和的な歩みを否定する「強い日本」という幻想を追い求めているのではないか。それは時代錯誤の孤立と破滅への道でしかないだろう。

私は終章において、そうした主張を展開した。私にとって、日本と日本人の現状はきわめて危ういものにみえる。私には日本列島は漂流しているように思えてならない。漂流のはてに、どこにたどり着くのか。過去、そして現在を虚偽で粉飾することなく、みたくはない現実もしっかりとみること、それなくして漂流は止まらない。

東アジアの新時代において、たとえ主役ではなくても、欠くことのできない重要な役割を果たすためにも、私たちは方向転換すべきである。私は方向転換が早急に行われることを強く願っている（文中の肩書きはいずれも当時のものであり、敬称は省略した）。